

市民プレス

2016 年
(平成 28 年)
4 月 5 日
第 72 号

発行人 「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作 デジタル工房
TEL 090(3048)5502
〒353-0004
埼玉県志木市本町 2-4-43

E-mail
hara@camelianet.com



市民の目線で市民が発信する地域情報紙

WEB SHIMIN
<http://shimin.camelianet.com>

「市民プレス」電子版（無料）を公開しました
<http://pr-shimin.camelianet.com>
電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。

CONTENTS

- PAGE 1
「伊豆殿堀」は新座、志木・宗岡などに
水の恩恵をもたらした
文部省の国語讀本『野火止の用水』
- PAGE 2
昭和二十八年の
新井康一氏の作品から
カラースライド『野火止の用水』
- PAGE 3
用水路を CG で
武蔵野台地を鳥瞰する
用水は水質が劣化して
志木市内の痕跡を辿る
- PAGE 4
百科事典はインターネットで
野火止用水は川を渡る いろは樋絵図

大正十五年
高等小学讀本
(巻一)
文部省の
『国語讀本』
から

第六章 『野火止の用水』

東京の西北数里、野火止という所がある。今は埼玉県北足立郡大和田町に属しているが、見渡す限り、うち続く畑の間には森あり、丘あり、家あり、流れあり、春は菜の花、麦の緑、秋はすすきの波、雑木の紅葉、武蔵野の面影が今に残って見るからに野趣に満ちた眺めである。

昔この付近一帯は、彼の知恵伊豆といわれた松平信綱の領地で、その菩提寺平林寺もこの野火止にある。平林寺の門をくぐって薄暗いばかりに茂った、楓の下を進むこと約二町、本堂について右折すれば、杉や檜の生い茂っている林の奥に、信綱の霊は静かに眠っている。数石の苔を踏んで、ここに詣でる者は、あたりの静けさを破って、玉の如き水が勢いよく流れているのを見るであろう。

有名な野火止の用水とは、即ちこれで、この水を引くについては、おもしろい話が、今に伝えられている。

元来野火止一帯は、土地高く、水利に欠け、土もやせ、見るからに貧しい村であった。信綱が川越城主としてこの地を領していた時、代官安松金右衛門は、新たに堀を掘って、玉川の水を引けば、必ず田畑が出来ると申し出た。そこで信綱がその費用の見積りを尋ねると、三千両あればよいという。当時の三千両は非常な大金であるが、信綱はこのために、後々の人まで利益をうける事が出来るならば、幸いであると、直ちに堀を掘る事を安松に命じた。安松は命を奉じて数百人の人夫を督し、いよいよ工事に着手した。こうして今の中央線立川駅の北方一里ばかりの所から、この野火止を過ぎ、志木町の新河岸川まで、六里の間に堀を通じて玉川の水を引くことにした。工事はやがて見事に落成したが、しかし意外にも一滴の水も流れて来ない。信綱はこれを見て、安松をなじると、安松はとかく明年までの猶予を願い出たが、翌年になつても水が、やはり来ない。ここに至つて、信綱は安松が地勢の高低を考えずに、工事を進めたものとして、その手落ちを責めたが、安松は尚自分を信じて疑わない。元来この付近は、土地が乾き、風が激しいために、これまで非常に土ぼこりが多く、客のある場合には、必ず座敷を掃いて入れなければならなかった。然るに今年は、そんな事が全くない。のみならず、野菜の出来のよいのも、例年と異なっている。これは水分が地をうるおしているためで、確かにかの堀のお陰に違いない。何とぞ更に一年の猶予を願い出た。然るに翌年の夏、一夜大雨が降ると、奔流が水音高く進み来て、たちまち六里の堀にみなぎった。信綱は始めて安松が自ら信じる事の強いのに感謝し、かつ厚くその功を賞したという。草ひいで木茂り見渡す限り豊かな、田畑の間を過ぎて、平林寺に詣でる者は、ただに春の花や秋の紅葉を賞するばかりでなく、今なお流れてつきぬ用水水に対して、当年の苦心をしのび、功績のあつた人々に深い感謝を捧げねばならぬ。

注 この元には、新井白石の神書（随筆）が使用されている。

新井白石（二六五七―一七二五）は、江戸時代中期の儒学者で、徳川六代、家宣・七代、家継將軍のとき、側用人の間部詮房とともに政治に力を尽くした。

* 漢字仮名混じり、句読点の一部は、現代で使用されているものに置き換えられた。

「伊豆殿堀」は、
「野火止用水」ともいわれる。
寛永十六年（1639）から寛文二年（1662）まで川越城主だった松平伊豆守信綱が、自分の領内に水を引くため玉川上水を分水した。この用水は、玉川上水の三十三もある分水の中では歴史的に最も古く、分水量も多く、天領以外に引かれた唯一の分水で、分水地点の小川村（現小平市）から新河岸川に落ち込むまでの距離は二十四キロに及んだ。

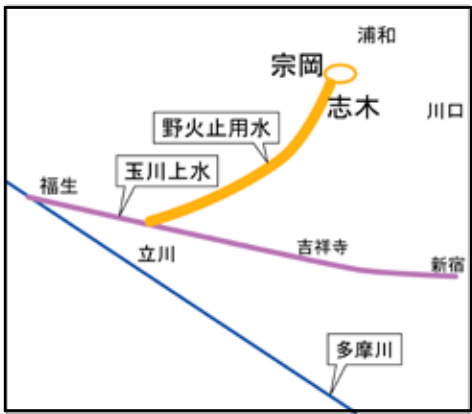
用水開削の目的は・・・
正保四年（1647）、野火止を領地として願ひ出た伊豆守信綱は、その翌年、岩槻にあった平林寺を新座に移建する計画をたて、承応二年（1653）、五十四軒の農家を野火止に招致・定住させた。用水の開削は、移住して来た農民の定住を図ることによって、平林寺の基礎を強化することを狙ったものと見られている。

玉川上水を分水する
すでに信綱の家臣、安松金右衛門が承応三年（1654）、玉川上水の完成に大きく貢献した実績があり、松平信綱が当時老中という幕府の要職に就いていたことが、江戸の市民にとって極めて重要な玉川上水を分水できた、と考えられている。

工期と費用は・・・
安松金右衛門が工事責任者となり、工期は従来は三年とされていた（現・志木市）に向かう。

「伊豆殿堀」は
新座、志木・宗岡などに
水の恩恵をもたらした

多摩川の上流から・・・
用水の水路



昭和二十八年の 野火止用水

「玉川上水」

多摩川の急流と別れた上水は、緩やかな流れとなって新宿方面に向かう、途中の小金井付近の上水は水量も豊富で、春の桜堤、夏の水辺等名所も多い。幕府の管理下にあった上水は、明治以降東京の水道局管理となる。



「平林寺境内の用水」

秋の紅葉、夏の緑等々の木々に映えて流れる用水に対して、遠く奥多摩の山々より流れてきたことに懐かしさを感じさせる。



「畑の中の用水」

数本に分水され、各集落の農地を巡っていた。野菜類の出荷には欠くことの出来ない用水だった。



「新田開発」

野火止用水の開削と平行して農地の開発が行われ、ここに用水をくまなく分水して流した。街道を中心にして各個均等に短冊型に住居、畑、雑木林等が分配された。



「志木駅付近から、西方を望む」

現在、結婚式場・宴会場の「ベルセゾン」が建っている付近で、遠く川越街道の並木が見える。当時は、川越街道と志木駅の間には、農家が点在するのみだった。「用水は農民の宝水とされ、用水組合による清掃作業も厳格だった。流れの分水等による水争いも起こったと伝えられる」

用水路をCGで・・・



武蔵野台地を鳥瞰すると・・・

「新井康二氏の功績を讃える」 昭和二十八年の野火止水用水をカラーで



・新井康二氏

大正11年志木市本町に生まれ、浦商（現浦和商业高校）に進学。

昭和18年千代田区北の丸「近衛歩兵第二連隊」に入隊して皇居守衛の任務に就く。終戦により復員。昭和28年初めてのカラーフィルムで「野火止水用水」を撮影、埼玉県スライドコンクールで特選となる。

左の写真は・・・

「現・慶応高校の校内を流れる用水」

野火止の中心より朝霞寄りの農地を流れて東に下った用水は、現在住宅展示場になった地域（かつては雑木林だった）を通過して、東上線の線路下（現在は地下通路になっている）を通過して現在の慶応高校校地内（以前は一面の雑木林）に入っており、清冽な水が豊かに流れていた。

新河岸川の方角に流れ、現・朝霞市内間木の水田に注ぐ。

場となっている。

志木市内に入ると姿を消す

しかし、平林寺の神域を過ぎると用水は暗渠化され、志木市域に入ると用水の水路は雨水下水路となり、往時の景観は市内から全く姿を消してしまった。志木市の、現・本町二丁目、二丁目辺りでは、大通りの中央を流れ、江戸時代から続いた貴重な歴史は全面的に消滅した。

志木市内の痕跡を辿る

なお、市内にはいくつもの分水路があったが、これらも今では痕跡を留めるだけになった。

幸い、NPO「エコシティ志木」のメンバーが、街の中に人知れず残る用水の跡を詳細に調査されているので、左下の図によってこれを紹介する。

用水は新座市域で東側の分流と本流に分かれ、西側の本流は、志木市内の入り口で分水、分流はさらに分岐していた。

「1」東側の慶應志木高校内のルート、西側は「2」志木市の『旧道』（志木街道）から大通りに入るルートと、「3」志木駅南口柳瀬川寄りの交差点からの分流。

「1」東側の慶應志木高校内のルート
東側ルートは新座・朝霞境界沿いの朝霞側を流れてきた水路が慶應通り陸橋の朝霞側地下道の位置で線路をくぐり、慶應高校構内を経て、朝霞・志木境界の谷津地の朝霞側斜面の中腹を新河岸川に向かっていったが、途中で分かれて、朝霞の宮戸方面にも流れていた。

今でも慶應高校の構内には素掘りの水路が森の中に残っている。

「2」中央の志木駅南口交差点から「志木街道」に入るルート

本流は、旧奥州街道に沿って市場地区（本町二丁目）に至り、新河岸川と交差して宗岡に入った。

「3」本流から西側に分かれた分水は直ぐに二本に分かれ、直進する流れは愛宕通りを西に進み、防衛道路との交差点（大塚建材）を過ぎた所で二手に分

かれ、いずれも柳瀬川方向の低地に向かって流れていた。

愛宕通りから右へ分かれた分水は線路を越えて柏町の「中道」を進み、氷川神社裏手から低地に向かって流れていた。

「中道」の片側歩道や氷川神社・第二福祉センター裏、住宅地内の排水路等に名残を残している。

用水の水車は動力として使われる

穀類精製のための水車は、高句麗の僧によって、推古天皇十八年（650）に初めて日本にもたらされたが、粉食の習慣のなかった我が国では余り普及することがなかった。しかし、江戸時代に入り城下町を中心に白米の需要が増大してくると、精米のために大いに活用されることになった。

享保期（1716～1736）と言われているが、やや遅れて玉川上水の本流、支流にも水車が開設されるようになった。

引又の水車は・・・

後に川岸の水車・中の水車・上の水車と呼ばれた各水車は、宝暦十二年（1763）・明和七年（1770）・安永五年（1776）にそれぞれ開設された。

野火止水筋では引又の水車が首位、玉川上水筋全体から見ても引又の水車が上位を占めたのは、次のような理由によるものと思われる。

①この地が宿場町・市場町・河岸場として米飯の供せられることが多かった

宿場町としては、奥州から府中に通じる奥州街道が、同時に中山道から川越街道へ抜ける間道としての役割も果たしていたので、高崎藩主松平右京亮の江戸出府往復の際の通過を始めて、一般の人馬の往来も頻繁で、これらの人馬がこの地に休息することが多かったようである。

また、引又は河岸場でもあり、遠くは青梅・八王子・甲府辺りにまで及ぶ大きな取引圏を背後に擁していたし、三と八のつく日には市が立って、周辺地域から多数の人が交易に集まったので、これらの人たちに提供する飯米用に米を精製しなければならなかった。

②酒造業が六軒あつて原材料としての白米の需要が大きかった。河岸場に近く、出荷するのに便利だったことと、井戸水が酵母の発酵を促す成分を多量に含有していたことによって、古くから酒造業が発達した。

！次ページ下段へ

志木市内に入った用水の流路を探る



「志木市場通りの用水」

大通りの中央を流れ、石橋が架かっていた。昭和40年に用水は暗渠となり、地下は下水路おなる。江戸時代には、用水の流れと、新河岸川の船便で江戸と川越が繋がれ、その中継地点として繁栄した市場商店街は、東武東上線の開通と船便の廃止によって徐々に活気を失っていった。

水質が劣化して



昭和二十年（1945）、第二次世界大戦が終結し、生活様式が急激に変化すると、野火止水用水は本来の役割を失い、生活排水が用水に入るようになる。特に昭和三十八年ころから、周辺の宅地化が進行したため水質汚染が激しくなった。その後、東京が水不足となつて分水が一時中止され、再度通水されたが、水質汚染は改善されず、昭和四十八年、東京都の水事情の悪化のため、ついに玉川上水からの取水は停止される。

埼玉県と新座市は、野火止水用水を復活する事業を策定した・・・

東京都とともに、昭和五十九年、高度処理水（下水処理水）を使用して水流を復活させた。そこで新座市域までの流域は清流が復活して、住民の憩いの

百科事典は インターネットで internet/online encyclopedia

画面上で文書を検索し、ウェブ上の他の情報源（リソース）に直接リンクできること（検索エンジンの基盤として）、アクセスの利便性がある、配本コストが不要なこと、などによって、インターネットの百科事典は、かつての分厚い百科事典の利用を過去のものとしてしまった。

ウィキペディアは・・・

「コトバンク」は・・・

kotobank（コトバンク）は朝日新聞社が主体となつてとりまとめたインターネット百科事典で、その特色は、新聞社が提供するウェブサイトとして、報道記事中の用語解説が強化され、朝日新聞サイト掲載記事にもリンクする。

2009 年 4 月、正式に発足した時には、同社と講談社、小学館、朝日新聞出版の各社が提供するものを核として、44 の辞書・事典の計 43 万項目を網羅した。

用語の横断検索ができるサービスとして公開されたので、百科事典から、人名辞典、国語・英和・和英辞典、現代用語辞典や専門用語集などの内容が検索でき、情報は随時更新され、追加されている。

「コトバンク」は、基盤を成す情報源が、選ばれた執筆者、これを審査・編集する段階を経ているので、用語解説の信頼性が高く、次項で紹介する「ウィキペディア」とは差別される。

日本語のインターネット百科事典として

ATOMICA は、高度情報科学技術研究機構（RIST）が、専門家に執筆を依頼して運営される。また、Weblio は、ウェブリオ株式会社によって無料で提供されている。その他の日本語の電子辞典として利用できるのは、Yahoo! 百科事典（ベータ版）、ソースは、日本大百科全書（ニッポニカ）、参加型では、ニコニコ大百科、はてなキード、アクセスの利便性がある、配本コストが不要なこと、などによって、インターネットの百科事典は、かつての分厚い百科事典の利用を過去のものとしてしまった。

執筆を依頼して運営される。また、Weblio は、ウェブリオ株式会社によって無料で提供されている。その他の日本語の電子辞典として利用できるのは、Yahoo! 百科事典（ベータ版）、ソースは、日本大百科全書（ニッポニカ）、参加型では、ニコニコ大百科、はてなキード、アクセスの利便性がある、配本コストが不要なこと、などによって、インターネットの百科事典は、かつての分厚い百科事典の利用を過去のものとしてしまった。

ウィキペディアは・・・



Wikipedia のロゴマーク

ウィキペディア財団によって運営され、多言語参加型（資格は不要）「ウィキペディア」は、執筆、審査、編集をすべてボランティアの恣意に任せることを特徴として構築され、国際的な規模で急激に成長した。トップの地位を占め、あるラリー・サンガーにより命名された。

Wikipedia という名前は、ウェブブラウザ上でウェブページを編集することができる「ウィキ（wiki）」というシステムを使用した「百科事典」（英：Encyclopedia）に由来する造語という。設立者の一人であるラリー・サンガーにより命名された。



世界で最大の規模の電子百科として、今では情報検索に不可欠なものとなっている。

日本語で書かれた項目は、日本の知識人がボランティアとして寄付したに違いないが、蓄積された情報量は、日増しに充実して、すでに膨大なものになっている。

ただし、問題とされる欠点は、辞典、現代用語辞典や専門用語集しばしば用語解説の信頼性への不安感となつていて、信頼性を確認する対策は、最終的には、すべて利用者に一任されている。

ウィキペディアのあらまし

英語で Wikipedia は、ウィキメディア財団が運営するインターネット百科事典。コピーレフト（著作権を保持したまま、二次的著作物も含めて、すべての者が著作物を利用・再配布・改変できなければならないという考え方）な

2007 年、京都にウィキペディアの創始者の一人。愛称はジンボ。1966 年生まれ、現在アメリカのフロリダ州に在住。



ジミー・ウェールズ
ラリー・サンガー

使用言語は 291 言語
項目数は全言語総計が 2016 年 2 月 11 日現在で、38,645,599
日本語版 1,009,791
運営元は
ウィキメディア財団
資金：寄付、非営利。
設立：2001 年 1 月 15 日（英語版）
設立者：ジミー・ウェールズ
ラリー・サンガー

↓前ページ最下段より 少なくともこの口から流れ込んで升を満たし、も天明年間（1784〜1789）反対側上部の口から激しく流れ落には造酒屋が四軒あった。また、ち、掛樋へと送られるのである。幕末には六軒の業者が年間合計二五六八石もの米を酒に醸造する鑑札を持っていたほどで、これだけ大量の米を精製するためには、当然のことながら水車の力を借りねばならなかった。

用水は川を越えて宗岡村へ

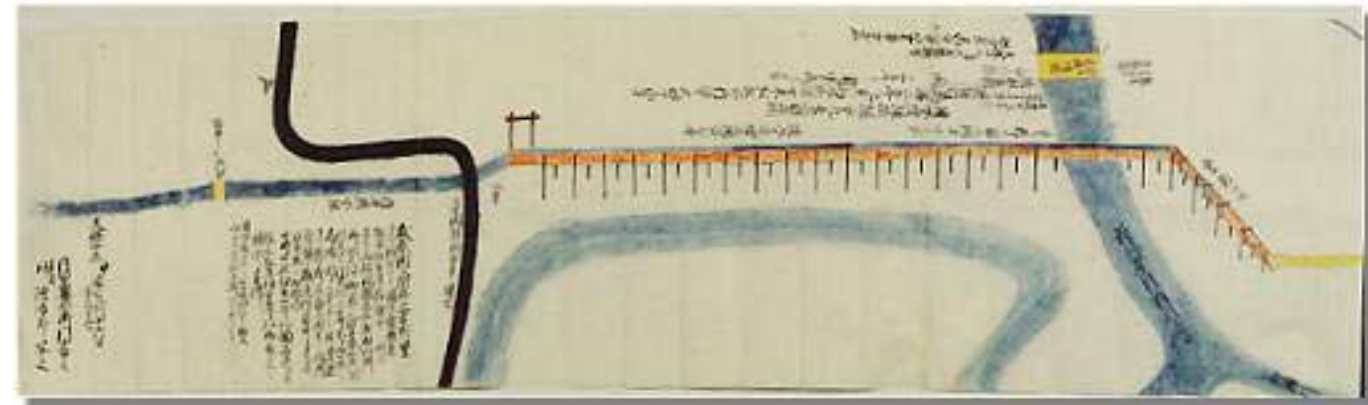
当初の用水は、「引又村」の坂下（現・市場坂上）で新河岸川に流れ込んだ。ところが、宗岡村を知行していた旗本岡部氏の家臣白井武左衛門は、かねがね、宗岡村が用水に乏しいことを憂えていた。そこで、この用水の末流を、対岸の宗岡村まで延長しようという計画を立案した。

宗岡村のうち、上宗岡と下宗岡を知行していたのは岡部氏だが、一方、引又の対岸にあたる中宗岡は、用水の開設者である川越城主松平信綱の領するところだった。そこで武左衛門は、主君岡部氏を通して信綱に願い出て許可を得て工事に取り掛った。信綱に願い出て許可を得て工事に取り掛った。二つの升を設けて水を高所に・・・

宗岡村まで用水を引くためには、その間を流れる新河岸川を渡らなければならない。そのため、引又側では、坂上から坂下までを埋樋とし、これに用水の水を通して、川の畔で一次的に地上で貯める。この水を、新たに掛けた樋へと登つてゆくように設計された。埋樋の長さは五八間・幅二尺で、この間に二つの高升を設置したのは、なんと埋樋の水を高所に登らせるための工夫だった。すなわち、坂上に設けた小升に一旦水を溜めて、これを河岸近くに設けた大升に送ると、埋樋によって坂を落下した水は、大升の脚部

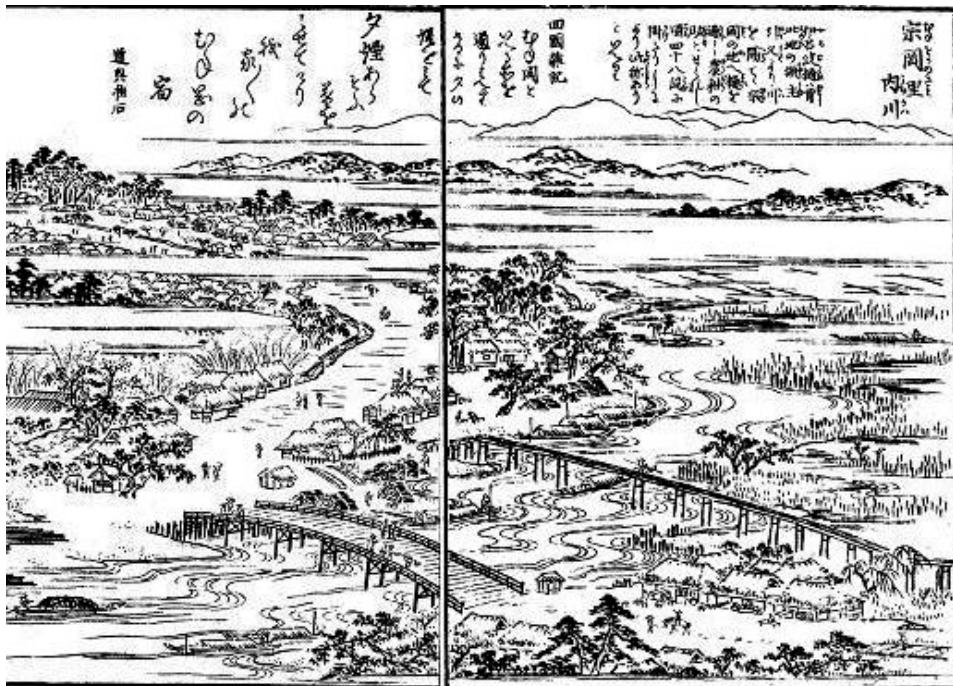
いろは樋絵図

天保十五年（844）内田太郎家蔵
いろは樋の各箇所の寸法や作動、樋の作成の経緯などが随所に記され、いろは樋の往時を知る上で貴重な史料（『志木市史（近世資料編三）』）。



る。この時の水路橋の柱は四十八本あったため、伊呂波四十八文字に因んで「いろは樋」と呼ばれた。川を跨ぐこの巨大な樋の姿は、やがて有名になって、多くの紀行文や地誌などに描かれた。

左図に示すのは・・・
江戸名所図会^{つえ}は、斎藤月岑が、江戸時代後期の天保年間に刊行した江戸と近郊の地誌紀行図鑑で、鳥瞰図を用いて描かれた（七巻二十冊）。「いろは樋」を望む鳥瞰図もその中に収められている。



左は、明治三十何年かの写真



「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL 090 (3048) 5502
編集部原宛にどうぞ